

ビルの谷間の小さな農園「キャッスルガーデン」

実りの秋を楽しむ

プランターで稲(米)、さつまいも、きゅうりなど育てる

都会のまんなかにある(こどもの城)も、実りの秋をむかえた10月の中ごろ、「幼児グループ」の子どもたちが保護者と一しょに、稲(米)とさつまいもの収穫作業を行いました。保育室外側のベランダには、「キャッスルガーデン」という「小さな農園」があります。ここでは、子どもたちが保護者と一しょになって、トマト、なす、きゅうり、すいかなど“食べることができるもの”をプランターなどで栽培しています。4月の新学期から交代で世話をし、その成長を見守ってきました。今月は、ビルの谷間の小さな農園「キャッスルガーデン」の活動を紹介します。



目に見えるかたちで成長し、結果を楽しめるものを選んで植える

「キャッスルガーデン」に植えられているものは、目に見えるかたちで成長し、その結果を楽しめるもの。ミニトマトやきゅうり、なす、すいか、さつまいもなど、ベランダという環境で育てられるものを選んでいきます。

子どもたちが手をかけて世話をすれば、それだけ大きくおいしいものができる。「子どもたちの世話」が子どもたちにも分かる形で返ってきます。すると、世話をすることも楽しくなります。ベランダでも、植物などの“育ち”を体験することができます。バケツを使った稲作りが各地で行われているようですが、工夫したいで都会のまんなかでもいろいろなもの育てていくことができます。



身近に自然とふれあえる場 子どもお母さんも交代で世話

「キャッスルガーデン」は、(こどもの城)5階の保育室外側のベランダにあります。広さは、全部で80㎡ほど。そこに大小合わせて20個以上のプランターを置いて、さまざまな植物を育てています。

植物を育てるためには、腐葉土などと土を混ぜる土作り、ミニトマトの「芽欠き」(リンスよく育つように、わき芽をむくこと)、すいかの受粉、水やりなど、成長にあわせて世話をしなければならぬことがたくさんあります。今年も、お母さんたちにも交代で手伝ってもらいました。

(こどもの城)は都会のまんなかであり、自然にふれる機会は多くありません。そこで、身近に自然とふれあえる環境を作れないかと始めたのが、ベランダで植物を育てること。プランターを使って、いろいろな植物を育ててみました。実ができる前に枯らしてしまったり、実ができたとおもったら野鳥に食べられてしまったり、失敗することもありましたが、年々収穫する量も種類も増えてきています。

ビルの5階のベランダというのは、植物にとって好ましい環境とはいえません。太陽のてりかえしも強く、地表より乾燥しがちです。水やりを欠かさず、すくりに枯れてしまいます。休みの前の日には多めに水をまくなど、きめ細かく世話をしなければ植物は育ってくれません。

稲作りは昨年同様。昨年は、実った米の多くを野鳥に食べられてしまいました。今年も、二重三重にネットをはって進入をふさいだり、かかしを立てて追いはらうなどして、なんとかたくさん収穫することができました。害虫などで育て方を調べるだけでなく、スタッフを稲作の体験プログラム(田植えから収穫まで)に参加させて実践的な経験をさせるなど、準備にも時間をかけました。



世話をしてきたきゅうりが実をつけました。とりたてのきゅうりは、表面にとげとげがありますが、食べてみるとやわらかくてみずみずしく、買ってきたきゅうりとは違った味わいがあります。おいしそうに食べる友だちを見て、いつもはきゅうりを食べない子どもたちも嬉しそうにニコッ、おいしそうにめざめたようです。「今までは食べなかったんですが、食べるようになりました」という声も少なくありません。

子どもたちは自分が世話を育てたものなので、実った作物には特別の思いがあるようです。大切に味わいながら食べるのももちろん、あまり気にしてこなかった「野菜」に関心をもつようになります。

「農業はほとんど使っていないので、こまめに世話をしなければなりません。みんなできていないに世話をすることで、いいものができる、いいものができる—世話をしたいがある、ということなので、できたときはとてもうれしくなります」と保育スタッフ。子どもたちもお母さんとも、同じように思っているに違いありません。

“世話をする”ことの大切さ、“育つ”ことの意味などを学ぶ

「土にふれる作業は、無心になれて気持ちいいです」「無心にかえったようで、楽しかったです」「小さな実がなっていて、とてもいいおしく感じました」という感想が、お母さんたちの記録ノートに記されています。そこに、「実をつけよう」と目立つように書かれたメモがありました。「実が大きくなってくるとうれしさのあまり、ついつい実をナデナデしてしましますが—表面についている毛がなくなるまで水をばかなくなり、その部分からくさります。じつがまんじょう!」

子どもだけでなく、お母さんも「キャッスルガーデン」を楽しんでいます。土をいじり、作物を育てることで両土の交流もすすむようです。保育活動のひとつとして親子



でいっしょに世話をするだけでなく、火曜日と水曜日には自由にベランダに入って作業できるようにしています。同じ作物を世話しているのに、「ミニトマトが赤くなってきたよ」「このあひだは、まだ育かたの」に親子に共通する話題になります。

10月には、親子で稲刈り、いもほりを楽しみました。稲刈りは、親子一組で一株の稲たばをかまでかりとりました。かまを使うのは初めてという人も多く、きんちょうしたおもちもでしたが、無事かりとりを終えました。1週間ほど干したのち、量が少ないので手作業で脱穀、収穫できた米は、ごはん茶わん2杯はほどですが、みんなで試食する予定です。

さつまいもは大奮作。つるを切り取ってから、ほりおこしました。プランターのなかでさつまいもは元気に大きく育っていました。ごはんにたきこんで「いもごはん」、自然のめぐみに感謝する“収穫祭”で、いまままでしてきた世話を思い出しながら、しっかりとさつまいもを味わいました。

小さな小さな「キャッスルガーデン」ですが、稲(米)、さつまいも、きゅうり、ミニトマト、なすなどを育てるなかで、子どもたちは“世話をする”ことの大切さ、“育つ”ことの意味などを体験的に学べるのではないのでしょうか。